エックハルト、ラテン語説教における恩寵論

中山善樹

はじめに

キリスト教思想において、古来、恩寵（gratia）の問題はさまざまに論議されてきた。そこでは神の被造物に対する超自然的働き、神と被造物、とりわけ霊的被造物との関係が問題になっているからである。そこからこの働き（actus）をどう理解するかによってさまざまな区別が設けられ、またそれらどうしの関係が問題になり、非常に細かく議論されており、ほとんど鳥瞰するのも困難になっている。

しかしそれらの些末な議論を避けて、問題を根本的な側面のみに限定するとすると、恩寵論を含む困難は、恩寵はそれ自体、超自然的働きであり、単に自然的理性（ratio naturalis）のみによっては捉えられないというところに存するであろう。恩寵は信仰の目によってのみ、明らかになるのであり、信仰自体が恩寵の賜物であるから、ここでは一種の循環が認められるのである。しかしここでもまた、「信仰の知解」（intellectus fidei）という中世哲学の根本定式が適用されるのであって、予め恩寵によって高められた信仰の目に対して明らかになった恩寵の姿が、なしうる限り

自然的理性によって知解されなくてはならないであろう(1)。それは理性のみによってではなく、理性と信仰の協同によってのみ、何ほどか明らかになるであろう。ここでは、このような立場に立って、恩寵の問題をエックハルトがそのラテン語説教（sermo）においてどのように論じているかを検討することにしたい(2)。

1　恩寵の定義

エックハルトによれば、被造物における神のすべての業が恩寵なのであり、恩寵とは、神のみの行為、ないしは賜物である。本来、恩寵（gratia）と呼ばれているものは、無償で（gratis）与えられているものであり、いかなる功徳（meritum）もなしに与えられているものである(3)。この意味では、被造物におけるすべての神の働きは恩寵であるということになる。「それによってすべてのものがあり、それを通してすべてのものがあり、そのうちにすべてのものがある」（ex quo omnia, per quem omnia, in quo omnia）（1コリ、8・6）。

さらにこの意味における恩寵は以下の五つの側面から考察することができる。まず第一は、この意味における恩寵を神は自己の力によって与えるのであり、第二は、神はいかなる代償もなしに与えるのであり、第三は、神は自己自身を与えるのであり、第四は、神がわれわれのうちで引き起こすところのすべてのものは、われわれにとっては受動的なものであり、外側からのものであり、第五は、神は一般的に善きことを引き起こすということである(4)。以上すべての意味において恩寵とは、神による、神の側から自主的になされる神の自己付与の業であるということができる。「恩寵は神の力の炎であり、神の純粋の流出である」（vapor est virtutis dei et emanatio dei sincera）（知、7・25）。

しかしエックハルトによれば、恩寵はこれだけではない。このすべての被造物に無償で与えられる恩寵の他に、神に気に入られた善き人々にのみ与えられる恩寵もある。すべての被造物に与えられる恩寵が神から発出するものであるのに対して、この善き人々にのみ与えられる恩寵は、神がペルソナ的識標（notio personalis）の下に捉えられている時に明らかになる恩寵のことである(5)。これは、前者の恩寵が神からの或種の流出であるのに対して、神自身のうちへの或種の回帰であると言われる。

2　恩寵と生命

以上のように、エックハルトは恩寵を一応、二種に区別しているがこの区別はエックハルトにとっては本質的ではない。エックハルトによれば、恩寵とは畢竟、神の子が生まれることの或種の噴出であり、その根は父なる神の最も内奥に存するのである(6)。その意味で恩寵は生命そのものである。「神の恩寵は永遠の生命である」（gratia dei vita aeterna）（ロマ、6・23）。

エックハルトによれば、このように恩寵は形相的には生命であり、恩寵は霊魂の能力に係わるのではなく、霊魂の本質、実体に係わるのであり、かくして恩寵はすべての自然を超えて、業を超えて、知性的能力を超えて、神のみがそこへ入り込むことのできる霊魂の秘所（abditum）において働くのである(7)。そこでは神は絶えず新たに子を生むのであり、そのことによって絶えず新たな恩寵を働くのである。そのような霊魂の秘所には、かつていかなる被造物も入り込んだことはなく、そこでは神といえども、たとえそれが思惟によるものであれ、すべての付加物から解き放た

れたものとしてでなくしては、入ることができないのである(8)。そこでは神は時間を超えて、空間を超えて、自己自身を流出するのであり、そのことによってそれ自身に固有の業をなすのである。聖書において、栄光のうちへ、「あなたの主の喜びのうちへ入れ」(intra in gaudium domini tui)(マタ、25・21)と言われているのはそのような事態を指している。

このような恩寵の業は、したがって当然のことながら、自然的光り(lumen naturale)のうちにのみ立脚している理性によっては捉えることのできないものである。それを捉えるためには、それ自身が恩寵の業である信仰の光り(lumen fidei)によるしかない。似たものが似たものを認識するのであり、存在の次元を異にするものは互いに認識することができないというのが、中世哲学における認識論の根本定式である。ここでは自然的理性の到達することのできない深処が指示されているのである。

このことから、さらに論を進めると、「神の恩寵によって私は私がそれであるところのものである」(gratia dei sum id quod sum)(1コリ、15・10)ということになる。「私がそれであるところのもの」とは、言うまでもなく上に述べられた霊魂の実体(substantia animae)のことである。それは私を私たらしめているものであり、それが実体と言われているのは、一応それが自存しているもの(subsistens)であると見なされているからに他ならない。しかしそれは完全に自存しているのではなく、この場合は、他の被造物から独立に存在しているということを意味しているにすぎないのである。そのような霊魂の実体を可能にしているものは、もはや私ならざる他者としての神からの恩寵の働きであるというのがここで主張されていることである。霊魂だけではない。すべての被造物は、エックハルトによれば、神からの恩寵の働きによって生起し、その存在において保たれているのである。「すべての生じたものは彼に

よってある」(omnia per ipsum facta sunt)(ヨハ、1・3)[9]。しかしすべての他の被造物が滅んでも、なおわれわれにとって存在するものであるとされているわれわれ自身の霊魂の実体ですら、もし神の恩寵の働きがなければ、直ちに無に帰するというのがエックハルトの主張である。「すべてのものは無であり、生きているすべての人間も無である」(omnia vanitas omnis homo stans)(詩、38・6)。エックハルトによれば、現在の生命は死すべき生命であり、死につつある生命であり、生きつつある死に他ならない[10]。

3　恩寵と脱我

このようにして神の恩寵の業がわれわれの存在の根拠として自覚される時、「私は生きている。しかしもはや私が生きているのではない。私のうちでキリストが生きておられるのである」(vivo iam non ego, vivit vero in me Christus)(ガラ、2・20)という聖句の根源的な意味が明らかになるであろう。私は神の恩寵の働きなくしては無である。この私が無であることの自覚が謙遜(humilitas)ということである。霊魂が無になるということは、私がこの世とこの世のすべての被造物に対して、とりわけ自己自身に対して死ぬことを意味している。それは自己否定の極みである。エックハルトはこのような謙遜はすべての恩寵の最も本来的な準備であると言う[11]。それに対して傲慢(superbia)は罪であり、直接的に恩寵に対立するものであって、すべての悪徳の始まりであるとされる。「最上のことは恩寵によって心を強固にすることである」(optimum est gratia stabilire cor)(ヘブ、13・9)。

重要なことは、エックハルトによれば、永遠なるものへの愛と地上的なもの、ないしは時間的なものを避けること

である。霊魂が謙遜になり、無になる所で、神はその霊魂のうちで恩寵の業を働くのであり、神に固有の働きは無から働き、救済するということである[12]。「無のゆえに彼らは救われた」(pro nihilo facti salvi illi)(詩、55・8)。そして神愛の極致はこの脱我(exstasis)にあるのである。この脱我においてわれわれは、この地上においてすら、神に合一するのである[13]。

このことが次の聖句が意味することである。「われわれは覆いをとった顔に於いて神とその栄光を見、それと同じ像のうちへと変形せしめられる」(nos autem revelata facie deum et gloriam eius speculantes, in eandem imaginem transformamur)(2コリ、3・18)。この聖句は本来、天国における至福者(beati)のヴィジオを描写したものと解釈されるのが通常であるが、エックハルトはこれを神愛の極致の形態であると把握する。霊魂は神愛の極致である脱我の境地に於いて、自己自身を否定して神のうちへと否応なく引きさらわれる。エックハルトによれば、それは霊魂が神と等しい形になる(deiformis)ことであり、むしろ神のうちへとその姿を変えることである。

このように、恩寵はその極みにおいて神と一なる存在を与えるものであり、それは神への同化よりもいっそう大なるものである。このように神と一つになった人をエックハルトは神的人間(homo divinus)と呼ぶ[14]が、そのような神的人間についてエックハルトは最後に次のように言う。「そのように完全に神の子であること(filiatio)は、ないしは誰かが神の子、イエス・キリストであることは、罪の許しと救い、すべての恩寵の始原にして根、基礎にして結合点、かつ終局であり、生命の泉である」[15]。ここに至って、エックハルトの恩寵論はその最深の地点に到達すると言えるであろう。

注

(1) エックハルトの全著作の意図は、キリスト教信仰と聖書の主張する事柄を哲学者たちの自然的論証（rationes naturales philosophorum）によって解釈することであった。Cf. Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem, n. 2. この言葉の含む重大な意味については、拙著『エックハルト研究序説』（創文社、1993）p. 13 参照。

(2) エックハルトはその恩寵論を、ラテン語説教集（Sermones）において最も詳細に展開している。使用テクストは以下の通りである。Magistri Echardi Sermones, herausgegeben und übersetzt von Ernst, Benz, Bruno Decker und Joseph Koch, Stuttgart 1956–1987（Serm.）.

(3) Cf. Serm., n. 256 : Gratia, quia gratis data, quia sine merito.

(4) Ibid. : primo, quia sua vi ; secundo, quia pro nihilo ; tertio, quia primo dat se ipsum ; quarto, quia quod operatur nobis et in nobis, passive ab extra est ; quinto, quia operatur bonum in communi.

(5) Cf. Serm., n. 258 : Prima usitate dicitur gatia gratis, id est sine meritis, data, secunda dicitur gratia gratum faciens. . . Secunda gratia procedit a deo sub ratione et proprietate personalis notionis.

(6) Cf. Serm., n. 263 : gratia est ebullitio quaedam parturitionis filii, radicem habens in ipso patris poectore intimo.

(7) Cf. Serm., n. 98 : gratia est supra omnem naturam, supra opus, supra potentias intellectivas, in abdito animae.

(8) Cf. Serm., n. 99 : Sed nec deus animae illabitur nisi nudus ab omni addito, etiam cogitatu.

(9) エックハルトの聖書解釈は独特である。むしろ『三部作への序文』において言われているように聖書の「珍しい解釈」（rara expositio）が企図されているのである。Cf. Prologus generalis in Opus tripartium n. 2. ここでも、通常は「すべてのものは彼によって生じた」と訳されている所であるが、エックハルトは 'facta' を 'omnia' にかけて、「すべての生じたものは」と解釈する。なおエックハルトの聖書引用は、現行聖書はもとより、ヴルガータ訳とも異なっているので、ラテン語原文を併記した。

(10) Cf. Serm., n. 132 : Vita enim praesens est vita mortalis, vita moriens vel, . . . mors vivens.

(11) Cf. Serm., n. 206 : humilitas proprissima est dispositio omnis gratiae.

(12) Cf. Serm., n. 324 : ut sit nihil, ut ex ipsa et in ipsa operetur deus, cui proprium est ex nihilo agere et salvare. エックハルトによれ

ば、「無からの創造」(creatio ex nihilo) の本来的意味はここにある。

(13) 拙論「エックハルト、ラテン語説教における『愛』の概念について」、「人文学」第一五八号載録を参照のこと。

(14) Cf. Serm., n. 263 : (gratia) dat esse unum cum deo, quod est plus assimilatione。「神と一なる存在」(esse unum cum deo) は人間を神的ならしめる。そこから、エックハルトはあるべき人間の極致としての神的人間 (homo divinus) なるものを主張する。これはエックハルトの人間論の終局である。

(15) Cf. Serm., n. 423 : sic per omnia filiatio dei sive quod quis sit dei filius Iesus Christus est principium et radix, fundamentum et nexus et finis remissionis peccatorum et salutis, omnis gratiae et 'fons vitae'.